

ディルド茶道

プリン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

鎮守府の流行という、謎の芸道「ディルド茶道」。
艦娘たちが、その正体に迫る。

(オリ主||提督には特にクセは無いし目立った活躍もしません)

pixivにも投稿しています。

<https://www.pixiv.net/novel/series/953265>

コミカライズ版もあります。

<https://www.pixiv.net/user/29468729/series/32922>

目次

デイルド茶道	一	1
デイルド茶道	二	4
デイルド茶道	三	11
デイルド茶道	四	14
デイルド茶道	五	22
デイルド茶道	六	27
デイルド茶道	七〜九	30
デイルド茶道	十・十一	36
デイルド茶道	十二・十三	41
デイルド茶道	十四・十五	44
デイルド茶道	十六〜十八	47

デイルド茶道 一

一

ある良く晴れた朝である。期間限定海域への出撃を一週間後に控えているにも拘わらず、この鎮守府の全ての艦娘には休暇が与えられていた。艦娘たちの不断の努力を信じての提督の配慮である。そこで、ある者は自主鍛錬を、ある者は羽休めをと、思い思いに降って湧いた休暇を満喫していた。

そんな中、板張りの渡り廊下を闊歩している艦娘が一人。すらりと伸びた肢体。しかし、装束の上からも、細身ながらよく鍛えられている事が分かる。歩くたび揺れる髪は背中まで伸び、髪は烏の濡れ羽のごとく黒々とし艶やかだ。そして、その頭に煌めく艷装は鋭く前に伸び、鬼を思わせる威容を誇っている。美しさと勇ましさの完璧な調和——世界七大戦艦が一隻にして、かつての連合艦隊旗艦。長門である。

さしもの彼女も、この日ばかりは普段の作戦会議や教導といった任務から離れ、鎮守府内を視察している。

「さて、たまには執務室や戦艦寮以外も見て回ろうと思いついて来たのだが、何やら騒がしいな……どうしたのだろう」

駆逐艦寮に近づくに連れ、その声がお互いに何か指図するものだと分かってきた。どうやら駆逐艦たちは、こんな日でも室内で何かしらの鍛錬を積んでいるようだ。

「皆で和室に集まっているのか、見に行かざるを得ないな！ 出撃がなかりうと午前中から研鑽に励むその姿勢、労わらねばなるまい」

長門は意気揚々と歩みを進めた。無論、鎮守府内でも彼女の武勇は知れ渡っており、駆逐艦の中には彼女を目標とする者も多かった。当然彼女にも己が武勲への自負と誇りがあり、それらが彼女を歩かせていた。

「待っている駆逐艦よ、ビッグセブンが今行くぞ」

しかしながら、誰にともなく言った言葉には、矜持や義務感から来

るのとは明らかに違った響きがあった。

*

「何なのだ、これは？ どうすればいいのだ！」

駆逐艦たちの集まっているその部屋に辿り着いた長門は、思わず声を上げた。

幼気な少女の姿をとったその駆逐艦たちは、それぞれ得体の知れない棒を持ち、ひたすら器をかき混ぜているではないか。

「デイルド茶道なのです！」

大人しげながらも、どことなく強い意志を感じさせる声。第六駆逐隊の末っ子、電が答える。しかし、長門はその言葉をすぐには理解できなかった。思わず頓狂な質問を口にする。

「何？ デイルド茶道はただの茶道ではないのか？」

「どういうこと？ デイルド茶道を知らないなんて、一人前のレディーにあるまじき事態よ！」

答えたのは長女・暁。長門は、彼女の、なぜ疑問に思うのか理解できない、といった様子を見て、己の無知を責めた。

「そうなのか……。長らく秘書艦を務めてきた私がそのような常識を知らないとは……。前線に立つことばかりに気を取られ、鎮守府の内情を知らずに居たということか、素直に反省しなければ……」

その落胆の声を聞き、すぐさま励ますのは三女・雷。

「そんなに深刻に考えなくていいのよ！ 長門さんはいつもこの鎮守府の主力として頑張ってくれているんだし、私たちの遊びを知らないのは仕方ないわよ！ 気にすることはないわ！」

雷の激励を受け取ってなお、長門は戦い一辺倒だったと露呈した己の在り方を良しとしない。

「いや、だからこそだ！ 普段第一艦隊を預かる私が皆のことを理解していないのは問題がある。私にもっとデイルド茶道の事を教えてくれないか」

その申し出を聞き、静かにこちらを見ていた次女・響が口を開いた。

「X O P O 3 0。戦いに真摯なだけでなく、それに纏わる一切の妥協を許さないその姿勢、さすが戦艦だ。私たちは見習わなければいけない。さあ、そこに座ってくれ。第六駆逐隊皆でイロハから伝授するよ」

その言葉を聞いた長門が、「ありがたいー」と座ろうとしたまさにその時。

『戦艦長門、提督がお呼びです。ヒトヒトマルマルまでに執務室に向かうように。繰り返します……』

鎮守府内放送のチャイムが鳴り、大淀の声が響いた。長門の視線が、決まり悪そうに壁に向かう。長門の目は今、戦場で見せる白刃のごとき眼光ではなく、陽だまりのような柔和な眼差しであった。呼び出しが放送された数瞬、長門は諦めたように見えたが、すぐ響に向き直った。

「済まない、昼には帰って来れる筈だから、後でまた頼んでいいだろうか？」

響は、期待を帯びた彼女の表情と真摯な言葉を受け止め、答えた。

「もちろんさ、信頼と呼ばれたのは伊達ではないよ」

デイルド茶道 二

二

「しかし、デイルド茶道とは何なのだ……？ 茶道はともかく、デイルドとは……」

「デイルド茶道」なる面妖な語を理解しかね、長門は考え込んでいた。神妙な面持ちで、来た道を黙々と戻る。凜々しいその顔は、疑問に囚われるあまり険すら漂っている。

彼女の心がここに無いことを知ってか知らずか、呼び止める者があつた。

「あら、長門じゃない、提督が呼びみたいよ？」

長門型二番艦・陸奥。姉妹だけあつてよく似ているが、外見も口調も心なしが長門より柔らかいである。彼女の呼びかけで不意に現実を引き戻された長門だが、歴戦の兵の威厳を崩さず答える。

「ああ、それでここまで来たんだが、少しばかり気が早かつたようだ。

そうだ！ 陸奥よ、デイルドとは何か知ってはいないか？」

迷わず疑問をぶつける長門。暁の口ぶりからすれば、長門以外なら知っていてもおかしくはない。

「え？ あら？ 何て？」

聞こえなかつたのだろうか、長門はもう一度尋ねる。

「デイルドだ」

その質問が鼓膜に達するや否や、陸奥は瞬く間に赤面し、滅多に見えないような表情——中破してあられもない姿をさらしている時の顔に近いだろうか——で、室内、かつ緊急出撃でもないことを忘れさせるような速さで駆けて行ってしまった。長門にはどういうことかわからなかった。

「おい、どうした、何も逃げることは無いだろう！」と呼び止めようとするも、陸奥の姿は既に見えなくなっていた。

陸奥の反応を訝りつつも、長門は先に進んでいく。と、もう一隻の戦艦が目に残る。

「おや、あそこに居るのは武蔵じゃないか。あの武蔵が恐れをなすよ

うなことはあるまい。おーい！ 武蔵！」

大和型二番艦、武蔵。上半身にはさらしだけしか巻いておらず、褐色の肌が露出し、その肉体の美しさを主張している。へそも、肩も、豊かな胸も。このような、ともすれば破廉恥な恰好をしていてもそれを感じさせないのは、そのきりりとした面持ちや、軍装であることを忘れさせないその服の意匠からだろうか。放たれる声はいかにも戦う女といった響きで、語る内容がその武勇でなくとも、それらを物語っているようである。

「おお、長門か。提督は期間限定海域の攻略に乗り出すらしい。私も次の出撃予定を通達されたぞ。おそらく長門もそれで呼ばれたのだろう」

「なるほどな。また武蔵の主砲が火を噴くのを見られるとは、胸が熱いな。今回も撃破数勝負といこうじゃないか。そうだ、話は変わるが武蔵よ、デイルドとは何か知っているか？」

「デイルド……？ 知らんな、新兵器か何かか？」

知らんと言いつつ、その問いが真剣なものであると察した武蔵は、即座に推測し、答えた。

「そうか……武蔵も知らないとは。駆逐艦の間でデイルド茶道なるものが流行っているらしくてな」

「なるほど、ではデイルドって奴を茶の素材、ないしは茶道具として使っているということだろう。む、那智が来るぞ、彼女なら知っているかも知れないぜ」

得られた情報からできる、過不足のない推理を開陳した武蔵。その視線の先に居るのは重巡・那智である。紫紺を基調とし、肌の露出もなるべく抑えられた落ち着いた装いは、並び立つ二人に比べればいくらか地味に見えた。面持も凜とし、その毅然さが滲み出るようだ。側頭部で一本に結われた黒髪が腰より下まで垂れ、彼女の個性を主張している。

「呼んだか？ 那智だ。二人揃ってとは珍しいな。戦術談義か何かか？」

「いや、鎮守府で流行しているデイルド茶道なるものについて、少し

な。那智は何か知らないか？」

涼しげな目を崩さず立っている那智に、長門は本日かねてからの疑問を投げかけた。

「デイルド茶道か。足柄と羽黒が執心のようで気にはなっているのだが、私はまだだな。妙高姉も誘って今度誰かにご教授願おうと思っっている」

「ほう、では那智はデイルドについて知っているのか」

武蔵もまた、デイルド茶道なるものに対する興味を持ち始めていた。長らくこの鎮守府に勤めていた長門さえ知らない「デイルド茶道」。その謎に、既に少しずつ囚われ始めていたのかも知れない。

「話にはな。何やら棒状の物らしい。どんなデイルドを使っているかで微妙に味が変わるらしいぞ」

武蔵は考える。棒状ということは道具であろう。そして、デイルド茶道というからにはデイルドは本来その用途には使われないものかだということだ。となるとやはり、デイルドは……。

長門の方は、武蔵の思索など意に介さずに話を進めていく。

「那智も興味があるとは、いい話を聞いた。私も昼から、駆逐艦たちにデイルド茶道を教してもらおうと思っていたところだ。後で妙高も連れて、一緒に来ないか？」

「悪くない話だな。私は夕方の演習まで時間がある。妙高姉も誘っておこう。」

休日と同席するという、普通であれば姦しく盛り上がりもしそうな提案。しかし二人は微笑もせず、まるで業務連絡であるかのごとく約束を取り付けた。しかしながら、その口ぶりからはそこはかとなない期待が漂っていた。

「さて、私は執務室に行かなければ。ついでに提督にもデイルド茶道について伺おうと思っっているが、皆も来ないか？」

すかさず二人を誘う長門。

「そうだな、もしかしたらこの流行も司令官に考えがあつてのことなのやも知れぬ。真意を問おう」

「私もデイルドが何なのか気になって仕方ない。面白そうだ。同伴さ

せてもらうぜ」

返事に迷いは無かった。この三人の間には、既に「ティルド茶道への興味」という紐帯が形作られ始めていた。

「では、私への用件が済んだら二人を呼ぶから、外で待っていてくれ」

*

白い軍服をその身に纏い、執務室の椅子に座っている男はそこそこ若く見える。それでいて、きりりと締まった目つきは、肩書相応の厳格さを湛えているようであった。彼がこの鎮守府の提督である。脇では薄桃色の髪をした艦娘が書類を収めた盆を持ち、直立不動で控えている。

長門を呼び出したのはやはり、次に出撃を解禁される海域の概要を説明するためであった。演説のように大仰な語り口ではない。むしろ淡々としていたが、信頼に値すると直感させる、迷いの無い口ぶりだった。

「……と、というのが今回の作戦案だ。迅速な攻略が求められる以上、期間中は全力出撃だ。苦勞をかけるが、毎度ながら頼りにさせてもらおうぞ」

「任せておけ。ビッグセブンの力、存分に揮わせてもらおう」

そのような提督だからこそ、長門の返事もまた自信に満ちていた。「心強いな。ああ、そうだ。次回の作戦には高練度の駆逐艦娘・軽巡艦娘が必要との噂でな。用心のために海域解放までは彼女を秘書艦にして対潜装備の備えをしておこうと思う」

提督が言い切るや、脇の艦娘が敬礼をした。手先が風を切る音まで聞こえそうな、鋭い動きであった。

「不肖、駆逐艦不知火、秘書官を務めます」

そう答えた彼女、不知火は、やはり駆逐艦だけあって背も低く、あどけなさの残る面影をしている。しかし、その声は磨き上げられた刀のように、鋭い気迫を纏っている。そして、挙動も、表情さえも一切遊びは無い。生まれながらにしてそのようであったとでも言わんば

かりの、洗練された佇まいである。それを見るだけで、彼女が娘であるより先に戦士であるのだと理解するには十分であった。

「不知火か、よろしく頼んだぞ。そうだ、提督に聞きたいことがある。……武蔵、那智、入っていいぞ！」

その声に合わせて、執務室の開き戸が左右同時に開け放たれた。提督から見て右のドアを武蔵が、左を那智が押したらしい。執務室のど真ん中、提督の正面に対峙していた長門の左右後ろに、那智、武蔵が立つ。その鶴翼の陣のごとき隊列、那智の伶俐な表情、武蔵の含みのある顔、相変わらずの長門、いずれもさながら提督に詰め寄るようであったが、提督はうろたえない。

「揃いも揃って一体どうした、気が合いそうな面子ではあるが」

そして長門はこれまでと同じように問う。

「提督、聞きたいことがある。鎮守府で流行している『ディルド茶道』とは一体何なのだ？」

「ふむ」

——多少の間があった。

「何？」

「ディルド茶道だ」

間をおいたところで、長門の返答は変わらない。だが提督は、己の聞き間違いではなかったことを受け入れられなかった。流行している……？

「はっ」

提督の否認もまた、姉妹からその名を聞いていた那智には受け入れがたい。

「どういうことだ！ 妙高姉も足柄も知っているのだぞ、長門は朝に六駆がディルド茶道とやらをしているのを見たそうではないか」

「ああ、実に楽しいげに器をかき回していた」

長門の言うことは事実である。だが提督にとっては、確かな現実味を帯びた、冗談には聞こえない長門の口調と、短いながらも認識を拒

む語の連なりは、一層の混乱を招くものでしかなかった。

「どういうことだ」

「うむ……提督も知らなかったか。こうなったら仕方あるまい。私もこの目でデイルドとやらを確かめてやるぜ」

武蔵は、提督が知らないとあればあてにはできない、ならば自分が行こう、と、まっとうに思考した。

「そうだ、私達はこれから六駆の面々にデイルド茶道を教わりに行く。二人も一緒にどうだ？」

「そこまで流行しているなら、把握していないのは流石に不知火の落ち度を認めざるを得ません。ここで留守番というのも性に合いませんし、不知火は同伴します。司令？」

ほか三人の艦娘も実戦を想定し、常に実践のもとに己の刃を研いできた面々である。相談せずとも意見はまとまった。

だが提督は違う。ましてやデイルド茶道である。そもそも何故デイルドなのか。なぜそんな単語をこの鎮守府で聞くのか。そもそも、デイルド茶道とは、何だ。

「いや、俺は遠慮しよう」

「そうか、またとない機会だと思ったのだが」

「食わず嫌いとは感心しないな、男が廃るぜ？」

「怖じ気づくなど、司令官らしくもない。見損なうぞ」

「つまらないわね」

「折角だ、行かせてもらおう」

ものの数十秒で意見を翻す提督。長門、武蔵、那智、不知火は、自らの言葉に相当の圧力があつたことを果たして自覚していたのだろうか……。

「よし、そうと決まれば皆で行くしかあるまい！ ヒトサンサンマルに駆逐艦寮玄関前で落ち合おう！ 作戦以外で提督と行動を共にするのは久々だ、胸が熱いな」

長門の言葉には提督と憩うことへの純粹な喜びがあつた。

「ふむ。時にはそういうのも悪くない」

那智はあくまで冷静であつた。

「フツ、この武蔵、主砲だけではない所を見せてやる」

何が主砲だけではないのだろうか。

「ディルド茶道戦隊、出撃する！」

不知火の気迫は遊びにも全力でむけられた。根が軍人だと何につけてもこうなるらしい。

そして提督は、今にも頭を抱えたかった。誰も聞いていなくとも「ディルド茶道ってなんだよ」と呟きたかった。

それを飲み込み「以上、解散」と告げることができたのは——提督自身にも正直なところよくわからなかった。おそらく、四人の態度があまりに軍人然としていたからだろう。

？

デイルド茶道 三

三

「おつ、武蔵じゃないか、一人とは珍しいな。隣いいか？」

食堂で山盛りのカレーを食べる武蔵に、声をかける者がいた。

「木曾か！ 嬉しい話だ、今日は大和とは別行動でな。是非一緒してもらおう、ところで木曾よ、デイルド茶道とは何か知っているか」

武蔵もまた、長門と同じ病気が出始めていた。

「デイルド……さどう？ 知らんな。さどうとは茶を点てる茶道のことだよな」

「ああ、そうだ。その様子だとデイルドが何か、木曾も知らないようだな」

そして、やはり「デイルドが何なのか」という謎は解けないのである。

「見当もつかないな。器なのか？」

「棒状の物と聞いている。さては新兵器かもしれないぜ」

この発言が後にあのようなことを引き起こすとは、武蔵は想像だにできなかった。

「新兵器だと？ 提督め、俺に言わないで何をしようとして……。いや、まだ俺に支給してくれないと決まったわけじゃないか。ま、何にせよ気になるな」

武蔵は、木曾が新兵器と決めてかかっていることは察したものの、特に訂正や補足はしなかった。もとより、さしたる考えがあつての発言でもない。

「だろう？ 私も気になつてな、今から見に行くところだ。折角だし、木曾も一緒に来ないか？」

「アリだな。秘密兵器デイルド……。ゾクゾクする響きだぜ」

そんな会話をしているうちにも、武蔵のカレーはどんどん減っていく。皿から消えるカレーの量に対し、露わになっている武蔵の腹が膨らんでいるようには見えない。

木曾も、消えていくカレーの行方を気にしつつカレーを頬張る。お

互いの皿の上は同じ割合で減っているが、体積を考えると恐ろしいことである。もつとも、それに驚愕する程神経が細い木曾でもないので、黙々とカレーを食った。食うのに集中しているから、近付く姉には気付かなかった。

「抜け駆けして食堂に行くなクマ！ 気取って一人飯しないで球磨達と食べるクマ！ あ、武蔵と一緒になんて珍しいクマ、木曾がお世話になってるクマ」

「ごちらこそ。いつもより早く来たらたまたま会ったのさ」

「球磨姉に多摩姉か。別に気取ってるつもりは無かったんだが……」

事実そんなつもりは無かった。単に忘れていただけだった。

「今日は一緒に食べる約束だったにや」

「そうだったか？ 悪いな」

「まあいいクマ。今からでも球磨達と食べれば許してやるクマ！」

「多摩達が食べ終わるまで待つてるにや」

「フツ、賑やかでいいな。だが私はデイルド茶道を見に行くから先に失礼する、今度は四人揃って食べようぜ」

姉らと会話して目を離れた隙に、武蔵のカレーは全て消えていた。

あの量があつという間に平らげた武蔵に、木曾は真顔で感嘆する。

「よろしくだクマ。武蔵の食べっぷりは見てて楽しいクマ」

「さて、俺もデイルド茶道って奴を見に行くとしようか」

流れで自然に退席しようとした木曾だが、多摩に腕を掴まれた。

「逃がさないにや」

「仕方ねえ、まあ約束は約束だ、俺もカレーおかわりするから一緒に食おうぜ」

「なんでそこで偉そうにするクマ！」

秘密兵器デイルドを目にすることが叶わず、内心で怨み言を言った木曾、だったが。

「それにしても木曾はデイルド茶道も知らないクマ？ 遅れてるクマ」

「俺以外は知ってるってのか……？ そもそもデイルドって何だ」

特に流行に聡いとは思えない姉からの、遅れてる、という発言を木

曾は真に受けた。木曾としては、別に情報交換を怠っていたつもりは無い。

深まり続けるディルドの謎が、木曾の脳に突き刺さっていた。

「いわば夜の魚雷にや」

木曾の想像力は、多摩の言葉にますます触発される。

『魚雷?! 夜戦専用なのか? ますます興味が湧いてきたぜ、いや待て……』

木曾は特別純粹すぎるわけでも、抜けているというわけでもない。むしろ戦いにおいても日常においても、末っ子ながら頼れるし、気遣いだってできる性質だった。しかしこの時は、秘密兵器であるという先入観が冷静な判断を邪魔していて、全てを額面通りに受け取ってしまったのだった。

「魚雷で茶道をするってのか?」

そして、当然理解していると思っただ姉達は、疑問が額面通りとは思わず冗談を返したのだった。

「魚雷を抱えたり魚雷に跨ったりしてるのもいるクマ、いまさら気にするなクマ」

『なるほどな……後で潜水艦連中にも聞いてみるか』

そのように思案しながら、木曾は二杯目のカレーを頬張った。

デイルド茶道 四

四

「遅かったじゃないか……。昼は既に済ませてきたよ、彼女とな」
「やはり戦艦の食事は圧巻だな、私もつられて早食いしてしまった」
長門と那智は、指定された時刻より先に集合場所で待っていた。彼女らはどこまでも折り目正しいのである。

「待ち合わせの時間はまだじゃないか、大目に見てくれ」

そして提督もまた、覚えている約束は必ず守る男であった。

「仕方ない——ん？ 不知火が来るが……。様子がおかしくないか」

長門は向かってくる不知火に気付いた。と同時に、普段は冷静な彼女がワナワナと震えており、その眉間には深い皺が刻まれ、仏頂面をさらに険悪なものにしているのに気付いた。もちろん提督も気付き、すかさず声をかけた。

「おい、どうした不知火」

「いえ、何も。不知火は問題ありません」

口ではそう答える不知火だったが、その心中は穏やかでなかった。先だって姉妹と交わしたやりとりのせいである。

『……陽炎と黒潮にデイルド茶道の話をしたら啞然としていたし、舞風はデイルド茶道の踊りなるものを踊りだしたし、時津風は何を聞いても躲す、そのせいで雪風まで興味津々になって、まるで一緒に騒いでいるみたい……。知らなかったのは不知火の落ち度といえ、ここまで虚仮にされるとは。この不知火、必ずやデイルド茶道とやらを会得してみせる』

「そうか」

その心中を覗くことは叶わないものの、訊いては不味いのは察し、特に詮索はしない提督。その判断は、ここでは最適解であった。

「そういえば、妙高は来なかったのか」

いつの間にか到着した武蔵が訊く。

「残念だが、妙高姉は今日は先約があつたらしい」

「では、参加するのはこの五人か。次は妙高も居るといいな」

普段はそれ程関わりのない妙高との交歓を楽しみにしていた長門にとつて、確かに残念は残念だった。しかし、今はそんなことよりデイルド茶道だ。

「行きましよう、提督」

不知火は、珍しく気が逸った様子であった。

*

駆逐艦寮の広間。ここに長門、武蔵、那智、不知火、提督が揃っているのは、なかなか物々しい。事情を知らなければ立ち入り調査か何かとも思いかもしれない。

「待たせた」

「気にすること無いわ！ あら、司令官も来たのね！ 相手が司令官でも、雷、張り

切つて指導しちゃうわよ！」

そんな面子にも構わず、世話焼きオカンの如き態度を取る雷はまぎれもなく大物である。いや、幼気な純真さの前には、威圧感など役には立たないのかもしれない。

「x o p o Ⅲ o。司令官が業務以外で来てくれるなんて、珍しいね」

「はわわ、さすがに緊張するのです」

「し、司令官が相手でも、レディーの作法について妥協するつもりは無いわ！ しつかりついてきなさい！」

「ハハ、お手柔らかに頼むよ」

彼女らの歓迎で思わず頬を緩めた提督であったが、その胸中は件の言葉に煩わされているのである。

『にわかには信じがたい……』

こんな、こんないい子たちが——デイルドで器をかき回しているなんて』

デイルド茶道。洋と和、みだら みやび淫と雅のキメラ。

そして、駆逐艦たちの健やかな魂は、提督の心に吹く煩悶などに靡きはしない。

「じゃあ、まずは順番に座るのよ！」

武蔵と暁、長門と雷、那智と響、不知火と電が向かい合つて座る。

「司令官さんが余ってしまったのです」

「いいのよ！ 私が二人いつペンに見てあげるわ！」

「ずるいわよ！ 司令官は私が指導してあげるんだから！」

「じゃあ俺は皆を見ているとするよ。淑女としての振る舞い、存分に見せてもらおう」

やろうとしていることはさておき、第六駆逐隊は楽しそうだし、自分の来訪を心底喜んでいようだったので、提督が水を差すわけにはいかなかった。

「そ、そんなこと言って、喜ぶと思つて！」

「任せなさい！」

やいのやいのと騒ぐ姉妹。

「……さて、やりますか。みんな、一人に一つずつ、茶碗はあるね」

それを、響の落ち着き払った声が制した。

「ほう、これはいい器、……なのだろうか」

「間宮のとさして変わらん」

器を持ち上げ、まじまじと検めていた武蔵と那智は、器にも何か仕掛けがあるのではないか、あるいは器の鑑賞もデイルド茶道の一部なのではないかと疑っていた。しかし、特に変わったところは見当たらなかった。実際、それは間宮に山ほどある、ぜんざいだの蜜まめだのを入れる椀である。

「間宮さんから借りて、ここに置かせてもらっているよ。見ての通り、茶碗には何の変哲もないんだ。デイルド茶道において大事なものは、これだよ」

その一言と共に、彼女はどこからともなく「ソレ」を取り出した。

一言では言い表せないその姿。

黒々と光る表面には、何のためかはわからないが筋が入っており、樹木を思わせる。一方でその先端に凹凸はなく、つやつやと光っている。枝から若芽が出ているかのごとき風貌だが、片手には収まらない大きさで、小枝と呼ぶにはあまりに太い。小枝というよりは、傘が開

き切っていないいきのこに近いかもしれないが、だとすれば柄に比べて傘が小さすぎる。

とにかく、概して生物的なその風貌は、とても兵器には見えない。

「……ふむ」

那智はただその姿をありのまま受け入れて。

「なるほど」

不知火は別になんでもないとばかりに。

「……ほう」

武蔵は一体それが何者なのかを考えつつ。

「これが……」

長門は待ち望んだその登場に興奮を抑えきれない。

今朝からずっと、彼女らの心に引つ掛かり続けていたその名は。

「ディルドなのです」

『ディルドだ……』

提督は、まさか現れないだろうと思っていた「ソレ」の登場をどのように受け入れればいいのかわからず、ただ目に飛び込んできた現実を脳内で言語化した。

「これがディルド……変わった形をしているな」

長門はそれを受け取ると、色々に持ち替え、舐め回すように眺めた。

「ふうん……何とも形容しがたい」

那智の言葉を聞き提督は安心したが、それはそれで大丈夫なのかと少し心配になった。

「なんだ、どんな兵装かと思ったら、ただの樹脂製の棒じゃないか」

手に取ってグニグニと曲げている武蔵はそう言い放ったが、別に興奮めしたわけではなさそうだ。

「驚くほどのことありません」

不知火は他の三人の様子をただ眺めている。

そして、彼女らを見守る提督は、もはや眩暈がする心地であった。ひとしきりディルドをいじくった武蔵が響にディルドを返すと、那

智はあることに気付いた。

「待て、我々の席にデイルドが無いが……」

「心配しないで！ デイルドは自力で収穫してこそ、一人前のレ
ディーよ！」

「む？ デイルドはどこかで採れるっていうのかい？」

武蔵はデイルドの収穫に興味津々だ。

「行きましょう！ ついてきなさい！」

提督は、あくまで平常運転の彼女らに圧され何も言えなかった。し
かし内心には、

様々な想念が渦巻く。なぜデイルド茶道などというものが流行す
るに至ったのか。

デイルドはどこからやってきたのか。間宮は器の使い道を知って
いるのか。

いや、そもそも収穫とは何なのか。

*

「このあたりで収穫できるのです」

電は今いた建物の裏手、建物沿いに背の低い植栽がされた地点まで
来て歩みを止めた。

「駆逐艦察の裏……。たまに通りますが、変わったものは見かけませ
んね」

「デイルドはこういう茂みに、ひっそりと置かれているんだ」

そう言うと、響はやおらしゃがみ込み、植栽の裏、雑草の伸びたと
ころに手を突っ込み、中を探りはじめる。

「x o p o 3 0、もう見つかったよ。幸先がいいね」

そう言って手を抜き出すと、その手にはショッキングピンクのデイ
ルドが握られていた。

「響すごいじゃない！ 流石六駆一のデイルド探し名人ね！」

「暁も負けないんだから！」

雷が響を誉めるのを聞いて、暁もガサゴソと茂みをかき分け始め
た。実に微笑ましい光景だ。探すのがこんなものでさえなければ
……。

「みなさんも、このあたりの茂みで自分のデイルドを見つけるのです」
「なかなか面白そうだ、ビッグセブンの力を見せてやる」

「フツ、負けはしないぞ」

「不知火を駆逐艦と侮らないで」

「こういう泥臭いのは足柄や羽黒には似合わんと思うのだが」

長門、武蔵、不知火、那智。何事にも妥協を許さない艦娘だけあって、不平ひとつ言わず這いつくばってデイルドを探し始めた。その姿勢は評価に値する。そして提督は、その恰好は那智にも似合わないと思っただ。

「おや……！ 見つけたぞ！ なかなか大きいな！」

そう言って長門が取り出したデイルドは、二十センチはあろうという、長い、半透明の水色のデイルドであった。響のと違って凹凸は無く、なめらかな姿をしていた。

「やるじゃないか。おつ、私も見つけたぜ。長さはそれほどだが太いな。デイルド茶道ではどちらが有利なんだろうか」

武蔵が見つけた肌色のそれは十五センチほどであったが、ラムネ瓶の底ほどの直径はありそうだ。その姿に提督だけが身震いをした。

「私のは大きく反っているぞ。無骨だが力強さを感じる。悪くないな」

那智の得物は黄色く、他のデイルドのごく緩やかなカーブよりも急な弧を描いていた。雄々しいとも表現できそうだが、彼女自身はどちらが上なのかもわからないので、ましてやその曲りの意味するところなどつゆ知らずであった。

「これはなんでしょう」

不知火のそれはほぼ響のと同じであったが、後端に吸盤がついていた。

「レアデイルドなのです」

「大事なものはレアリティや性能ではなく練度ですが。まあ、貰っておきます」

電は、突然の発言を理解しかね、首を傾げた。

「ゲストの皆のデイルドは揃ったわね！ 戻ったらいいよデイルド

茶道本番よ！ 見てなさい！」

「その前に洗い場でデイルドの処理をしなきゃ！ 収穫したデイルドはたっぷりの塩を手にかけて塩もみするのよ！」

彼女らは寮の外にある流し場に集まった。鍛錬中の給水や、花壇への水やりに使うところだ。

そして、六駆の四人はデイルドに塩を塗りたくった。

「ほう」

デイルドを握りしめ、響の肩越しにその作業を眺める長門。

「こうやって、段になつているところをやり残さないように、丁寧にこするんだよ」

そう言いながら、響はじよりじよりとデイルドをこすり始めた。胡瓜であればとげがぼろぼろ落ちるのだろう。

デイルドは一体何のために？ そんな疑問を持つこともなく、皆一斉にデイルドをこすった。軍隊仕込みだけあって、疑問を差し挟む前に体が動くのだろう。

「むう、なかなか骨だな」

那智は、弓なりのデイルドがくるくる回るのに難儀していた。

「艤装の手入れに感覚は近いな」

武蔵は黙々と極太デイルドをこすった。確かに洗い応えはありそうだが。

「吸盤のせいでこすりにくいですね」

そう言いつつも、不知火は吸盤の裏や吸盤との境目も丁寧にこすりあげた。完璧主義者なのだ。

提督はただ、夢なら覚めてくれと願いながら立ち尽くした。自分が何を見ているかはやはり理解できなかつたが、作業に専心する後姿だけは美しいと思った。

「こすった後はよく洗うのよ！ お茶が塩味になっちゃうわ」

雷に従い、皆入念にデイルドを洗い流した。

「こんな感じでいいだろうか」

「十分なのです」

「自分で拾って洗ったデイルド……なかなか愛着が湧くではないか」

黄色いデイルドを眺める那智の顔は、相変わらずの仏頂面だが、その言葉は確かに愛おしげだった。？

ディルド茶道 五

五

再び和室。

「道具もそろったし、お手本を見せるわよ！」

雷の言葉に、長門たちは座布団の上で少し体をずらした。

「そういえば、入退室の作法なんかは無いのか？」

武蔵は茶道について、その外観以外に、「作法が面倒くさい」「抹茶は苦い」程度の知識はあった。

「鎮守府に茶室はないし、そのあたりはあまり気にしていないよ。畳の縁を踏まないことさえ気を付ければ大丈夫だよ」

「背筋を伸ばすのよ！ つて、言わなくてもみんな伸びてるわね」

雷の言うとおり、長門たちの背は、天井から吊るされているかのごとく直立している。

「軍人なら当然です」

「みなさん、こうして並ぶとすごい迫力なのです」

「じゃあ、始めるわよ！ お菓子があるときはお菓子を食べるのだけど、今日は練習だから用意してないわ！」

暁の言葉に誰も表情を変えなかったが、武蔵は内心少し残念だった。

「競技としてのディルド茶道に亭主と客、出す側出される側はないの。無心で一斉にお茶を点てるのよ」

「茶道具には限りがあるから、今回は茶釜なんかのお湯を沸かす道具は真ん中に置いたけど、より格式高いディルド茶会ときは違う置き方をするんだ」

「今回は省略するのですが、お茶碗を温めるのもっとおいしくできるのです」

「テカテカした『棗』にお抹茶が入っているわ！ 手元の小さいスプーンみたいな『茶杓』ですくって茶碗に入れるのよ！ 右手に茶杓を持って、左手で棗を取って左ひざの前に置くの！」

「ふむ」

那智が冷静に返す。暁、響、電、雷が一気に話したが、誰ひとりうろたえるものは居なかった。提督は何も言わず、とにかくこの事態について考えていたので、特に聞き返しはしなかった。

「右手に茶杓を持ったまま、棗のふたを外して右ひざの前に置くのよ」
暁のその所作は実に無駄がない。日々の成果なのだろうか。

「茶杓一杯半のお抹茶を茶碗に入れるのです。入れたら茶碗の縁で茶杓を打って茶杓に付いた抹茶を落とすのです」

「戻すときはさつきと逆の手順……茶杓を握ったまま棗の蓋を閉めて、棗をもとの位置に戻して、茶杓を棗の上に置くのさ」
「なるほど」

不知火の顔は真剣そのもので、まるで戦いに出ているかのようなのである。

「茶杓で釜のお湯をすくって茶碗に入れるわ！一杯で大丈夫よ」

「いよいよか……」

雷がお湯を注ぐのを注視する長門。その昂ぶりが口から漏れる。

「さあ、見てなさい！右手でディルドを取ってかき混ぜるわ！」

「Y p a a a a a !」

「いくわよー！」

「な、なのです！」

姉妹は先程までの優美な動きからは想像もつかないほど俊敏にディルドを取り、凄まじい勢いで器をかき回し始めた。

「我々も続くぞー！」

「フツ、面白い！」

「行くぞー！」

「やらせてもらいます」

長門、武蔵、那智、不知火も、ディルドを手を取った。

そして、広間には、ディルド茶道の音に満たされた。

その攪拌のスピードは、水面を打つのを追い越し、器から立つのはシャカシャカという連続した律動となっていく。

「あら、ダメができてしまいました」

そう言いつつ、不知火は止まらない。

「ディルドで押し潰すのです」

「成る程。ありがとうございます」

ダムを潰すに合わせ、チャプチャプという水音が立った。

「かき混ぜ方は好きにすればいいよ。この鎮守府は今、多くのディルド茶道流派が競い合うディルド茶道戦国時代なんだ。第六駆逐隊が誇る『暁流』は全体が泡立つまでかき混ぜるよ」

「私が家元よ！」

響の解説に合わせ、暁が胸を張った。

「しかし……この棒で本当に泡が立つのか？」

那智がそう思うのも至極まっとうだ。見ている空気が含まれている気がしない。ディルドはそのようなフォームではないのだ。しかし、電は平然と答える。

「そこが腕の見せ所なのです」

そして、やればできると言われればやらすにはいられないのが彼女たちなのだ。

「そうか、ではビッグセブンの力を見せてやる」

すると、水音は更に間隔を短くし、船のスクリューのごとき調べを奏でる。

「すごいじゃない！ 流石連合艦隊旗艦を務めただけのことはあるわね！」

「フフ、そうだろう、そうだろう」

猛然とかき混ぜる長門に雷が感嘆している。連合艦隊旗艦とディルドの扱いに何の関係があるのかは、提督にはよくわからなかった。

「やるじゃないか長門」

武蔵も負けじと手を早める。しかし相棒の太きゆえか、水音は不規則で大きかった。

「長門さんも武蔵さんも、レディーなんだからもつと静かにやってよ！」

その二人には暁も苦言を呈した。しかし、他の面々の悪戦苦闘ぶりを尻目に、那智は涼しげにかき回している。

「ふむ。勝手がわかってきたぞ」

「хорошо。無駄のない動きだね」

そして、不知火はダマの存在を許せなかった。

「なかなかダマがなくなりませんね」

「そのくらいなら気にしなくていいのです」

電の労わりも介さず、不知火はダマの駆逐に専心した。

しやかしやか、しやかしやか。

この場の光景が、その儀式の立てる音が、そこに響く声が。ありとあらゆるものが提督の脳を揺さぶった。これがデイルド茶道。我が鎮守府の流行……。

受け入れられない提督。それでも、デイルド茶道の音は頭の中に響き渡っている。

ちやぶちやぶ、ちやぶつ。ちやばちやば。

しやかしやか、しやかしやか、しやかしやか、しやかしやか、しやかしやか、しやかしやか、しやかしやか、しやかしやか、しやかしやか、しやかしやか、しやかしやか。

じやぶじやぶ。

しやかしやか、しやかしやか、しやかしやか、しやかしやか、しやかしやか、しやかしやか、しやかしやか、しやかしやか、しやかしやか、しやかしやか、しやかしやか。

しやかしやか、しやかしやか、しやかしやか。

「……すまん、そろそろ仕事に戻らないと」

「えっ？ もっと暁のこと見ていつてよ！」

「執務室に戻られるなら、不知火もご一緒します」

「いや、折角だし気が済むまで習っておけよ。俺は大丈夫だ」

「そうですか。ではお言葉に甘えて」

提督は、皆が自分と空間を共有するのを喜んでくれるのは嬉しかったが、この空間に居るのは耐え難かった。しかし誰を責めるわけにもいかない。自身を責めるべきなのか？

否。責任以前にこの光景は、受容するには——あまりにも現実離れしている。

「普段の皆が楽しく過ごしているのが分かって何よりだ。また何かあったらお邪魔させてくれ」

「До свидания」

皆が楽しそうなのはきつと良いことなのだ。だから白けさせないよう、提督は持てる限りの気遣いをしてその場を離れた。やたらと足元がふらついている。彼の足場を奪っていたのは、酒からくるような浮遊感ではなく、許容しきれない現実の重みだった。

デイルド茶道 六

六

提督はひとり、先ごろの様子を述懐しつつ歩いた。どうして鎮守府にデイルドが落ちているんだ。早急に対処しなければ鎮守府の風紀が――

「どうした？ 浮かない顔してるじゃないか」

そこに声をかけたのは、木曾であった。

「ああ、大丈夫だ」

「……相談ならいつでも来てくれよ」

提督は、木曾の気遣いをありがたく思うと同時に、己の配慮が見透かされているようでなんともバツが悪かった。木曾は知的という印象こそ無かったが、風貌や言動の荒々しさに反し、思いやりに満ち、洞察にも優れていた。

「そうだ、俺から一つ聞いていいか？」

「ん？」

「デイルドってのは、何なんだ？」

しかし、事情があるらしいといえども、今回は提督の隠し事を看過することはできなかつた。木曾は己が信用されている自覚があつたし、事実その通りであつた。事実でないのは「提督が隠し事をしている」という憶測ただ一点であつた。

「う、うわああああああああああつ?!?!」

「おいおい、いきなり大声出すなよ」

そして提督には、その手の下ネタには縁が無さそうな木曾さえも、「デイルド」などと言い出したことがあまりにもショックであつた。

「い、いや、落ち着け。木曾は、デイルドが、何か、知らないんだな」

「知らないが……やっぱりお前、俺に隠してたのか？」

「いいんだ。知らなくていいことだ」

「水臭いな。俺とお前の仲じゃないか」

「木曾だからこそだ」

木曾は腑に落ちない顔で、提督の目をまっすぐ見ている。言葉は無

い。

「木曾が信頼に足る戦友で、大切に思っているからこそ、それは教えられない。調べるのもよせ、そのうち分かる時が来る」

「どういうことだ」

自分もいつの間にか知っていたし、木曾もそのうち知るのだろうと思つての言葉だった。大人びた思いやりとも言えよう。しかし木曾は、大人のする誤魔化しで煙に巻かれたと思つた。

「だが、お前はまだ知らないように良かった。お前まで知っていたら、俺は……」

戦い一筋の木曾がそのようなもので汚されていないことへの安堵から出た言葉だった。しかし木曾は、提督にとってデイルドについて聞かれることが不都合なのだと思断した。

「待てよ、俺が信じられないのか？」

「信じているからこそだ」

「チツ……！」

自分の信義を疑われていると思ひ、木曾は心底不服だった。もはや腑に落ちないというより単に恨めし気である。

提督は、いずれわかつてくれると信じ、己を責めるその眼差しを受け止めた。それが隠し立てすることへの罰だと思つた。

「こればかりは悪く思わないでくれ……」

これ以上デイルド茶道について語ると却つて木曾を刺激すると思ひ、諦めてくれると信じて、提督はその言葉で会話を結んだ。初めて彼女にあいまいな返事をしたかもしれない。

木曾は聡明だが一本気で、回りくどいのは嫌いだった。提督もそれを知っていたから、これまで知りうることはなるべく教えてきた。そればかりに木曾は、提督には教えられないことと教えられないことがあるのを知らなかつた。

デイルド茶道は、提督にとって機密以上に広めたくないものであつた。

提督は、さらに重くなった足取りで執務室へ向かつた。それを視線だけで見送る木曾は心底むしゃくしゃしていた。

『デイルドの正体を知ったら消されるっていうのか？ 一体何なんだ、デイルドって奴は……。それに気に入らないねえ、あの態度。俺がボロを出すだけでも？ あんなに思いつめた顔してたってのに、どうして俺を頼らないんだよ……。！ こうなったら……。！』

「フン、俺に隠し事をしようたって無駄だと教えてやる……。！」
己を頼ってくれない提督へのもどかしさが、彼女の執念に火を点けた。

『武蔵は知っていたし、おそらく戦艦には教えてるんだろう。まずは戦艦寮に行ってみるか？』

ディルド茶道 七〇九

七

「ふう、ただいま」

「お帰りなさい、提督。暇でしたから、書類を片付けておきましたよ」
執務室のドアを開けた先には、那智の姉、妙高が待っていた。

背格好は那智に似ていたが、前髪を切り揃え、後ろ髪を編んで結ぶという手の込んだ髪型や、太く短めの眉、その下のたれ目が目を引く。いかにも控えめそうで、那智の漂わせる厳格さとは真逆な雰囲気纏っている。

「ありがとう。世話にな……って、なんで妙高が」

「あの、流石に怒ってもよろしいでしょうか」

「ん……？」

思い当たる節がなかったので、提督は数秒ほど、怒られるいわれは何かと思案した。

「ああっ！ 間宮に！ 今日だったか、済まない……」

提督はかねてから約束していた会食を忘れていたことに気付いた。「もう何度目だと思っておいでなんです。前も羽黒との昼食をお忘れになったじゃありませんか。提督も手帳の一つくらいはお持ちでしょう。机のカレンダーだって飾りではないのですよ？」

妙高の言い分はごもつともだったので、提督は平謝りに徹した。

「面目ない、なんでもするから許してくれ」

「なんでも？ じゃあ、まずは態度に示して下さい。ほら、私の目の前で今月の予定を全部書くんです」

「ああ……申し訳ない……」

印象に反して、妙高は言うことは言う性分であった。だが、感情的に喚き散らすわけではなく、その口調は終始穏やかであった。なにも私怨をぶつけないわけではなく、提督を慮ったことだからだ。

「提督は戦略については間違いなく一流ですし、この鎮守府も提督のおかげで保たれているのは間違いありません。私たちも皆提督のことを信頼しているのですから、こういうことで信用を無くしては勿体

ないですよ？ それに信頼しているからこそ、約束を反故にされたらみんな悲しいんです……」

しかしながら、彼女の丁寧な性格が相俟って、その話は常に長くなる傾向にあった。とはいえ提督も、彼女が自分のための思っでしているのは重々承知だったので、スケジュールを記入しつつもすっかり話を聞いていた。

しかし。

「……まあ、反省なさっているみたいですし、ちゃんと予定が立てられたら、間宮でお茶にしましょう」

ただでさえ神経質になっていた提督の思考回路は、茶という言葉を受信して完全にショートした。

「お茶ア!?!」

「てっ、提督?！」

彼は唐突に立ち上がろうとし、そのままふらっと倒れた。？

八

一方、駆逐艦寮では。

「みなさん、すごい集中力なのです」

しゃかしやしかしやしやか。

相変わらず、皆一心不乱に器をかき回していた。

「なかなか泡立たないのだが」

長門は、悪戦苦闘しつつも、コツをつかむべくひたすら器の中をデイルドでかき回した。デイルドについての角度はデイルド茶道に役に立つのではないかと考えた彼女は、持ち方を変えたり、デイルドを回して向きを変えたりと、様々な混ぜ方を試していた。

「初めはみんな、そんなものさ」

その様子を見て、響は静かに励ました。長門も響も、同僚の中での上下はあまり気にしない性質であった。

「若葉なんて、『特訓だ』って二十四時間寝ないでかきまぜ続けたのよ」「恐るべき気迫だ」

暁の語る信じがたい事実には、那智の目つきが険しさを増した。手元

は相も変わらず円運動を続けている。

「同じ駆逐艦として、負けてはいられませんね」

不知火の器からはようやくダマが無くなったらしい。

「一筋縄ではいかないな。流星は淑女の嗜み、か」

武蔵の手元からは、風車に突風が吹いたときのような、シユウウウウという風切り音が響いている。彼女は一人、己の持てる全力でかき混ぜるとどうなるか実験していた。

「武蔵さんもつと静かにかき混ぜて！ 茶碗から謎の蒸気が噴き出してるわ！」

それを見た雷は大慌てで静止した。長門は負けじとかき回した。

「長門さんも張り合わないですよ！」

そんな二人を尻目に、黙々と器を混ぜるのは那智。

「ふむ、結構泡立てられるようになってきたな。私のデイルドはなかなかの名器だったらしい」

「いいや、那智のスジがいいのさ。X O P O M O」

九

木曾は、当初の予定通り戦艦寮に来ていた。

多くの艦は寮を留守にしていたが、会話が漏れてくる部屋があった。

「やだ日向それって……」

「いや、こちらならあるいは……」

木曾はその声に馴染みがあった。鎮守府を支え続ける最古参の一角、伊勢と日向である。彼女らも木曾と同じくらい、否、木曾としては認めたくないが、木曾以上に提督の信頼が厚い艦娘たちである。悔しいが、彼女らには話しているかもしれない。そんな期待を胸に、木曾はその部屋の戸を叩いた。

「失礼していいかい？」

「あら、木曾じゃない。こんなところに来るなんて珍しいじゃん、入って入って」

そう気さくに答えると、戸口まで歩いてきて木曾を迎えるのは戦艦

伊勢。つぶらな瞳と親しげな語り口からは、古参兵であるとするぐにはわからない。戦場では重厚感溢れる艤装を纏い、並々ならぬ存在感を放っているのだが、今そこに立っているのは優しいお姉さんそのものである。

「邪魔するぜ。ってなんだこれは」

踏み込みで靴を脱ぎ、居室へ入ろうとした木曾だが、足元に風呂敷が広げられ、何かはずらりと並べられているのを見て踏みとどまった。

「艦載機たちだ」

そう答えるのは戦艦日向。姉とは打って変わって、落ち着き払った態度にはいかにもベテランという風格がある。表情も余裕を見せたまま変わらず、まるで底が見えない。

「日向ったら、しおいちやんの晴嵐がほしいから、自分の秘蔵艦載機と交換してもらおうってさ」

「ほう、艦載機は提督が管理してるとばかり思っていたが」

艦載機を装備したことはおろか装備を具申したことすらない木曾は、それらの管理についてはまるで知らなかった。

「私たちにも、艦載機を選ぶ自由があってもいいのではないだろうか」
主張でも説得でもなく、ただ事実を伝えるかのような、無感情な口ぶり。

「考えたことも無かったぜ。まあ、各々が勝利のために創意工夫するのはアリだろうな」

「そうだ、艦載機との絆、そして艦載機を理解。それらは勝利の足掛かりになる筈だ。そういえば、木曾は艦載機に否定的ではなかったか？」

「そいつは単なる俺の主義だ。他人が使うのにどうこう言う気はないし、日向たちは艦載機で戦果を上げて有効性を示しているじゃないか。大アリだろう」

日向も木曾も、主張を押し付け合うほど頑迷な性質ではなかったし、お互いにそれぞれの戦果を認め合っていた。それを確認し合えたのは、お互いなんとなく嬉しかった。

「フツ」

「あ、今笑ったでしょ日向」

「……それで、木曾はどうしてここに来たんだ」

笑みについては語らず、本題を切り出す。

「訊きたいことがあつてな。デイルドって何なんだ？」

数秒の間、日向は硬直した。

そして、伊勢に向き直り、ぼそぼそと尋ねた。

「いいのだろうか、伊勢」

「日向に任せるわ」

伊勢は心なしに赤面気味になり、日向から視線を外しながら答えた。

「おいおい、勿体ぶること無いだろう。それとも本当に『ヤバイ』やつなのか？」

「ヤバイといったらヤバイ……わね」

「知ってるなら、俺は聞き出すまでここを離れるわけにはいかないねえ」

伊勢は『どうすんのよ』と、助け船を求める一心で日向を見やった。

日向は仏頂面のままで、しかし口元を隠しやや俯き、思考する。

『なぜここまで彼女はデイルドに拘るんだろうか。事情はわからないが、教えなかったらほかの連中にまた聞きに行くのだろうな。そんなことをしたら、彼女は変質者扱いを免れ得ないだろう。かといって、「男性器を横した性具だ」と事実を答えてしまつていいものなのだろうか。参ったな』

「どうした？」

考え込む日向を見かね、木曾が追い込む。

木曾の態度を受けて、日向はついに決心した。

「ああ、知ってしまったなら教えないわけには行くまい。デイルドは——」

木曾は、ついにデイルドの真実が暴かれるという期待と、危険な情報を知ってしまうことへの緊張感に、ごくり、と唾を飲んだ。

そして、日向は、告げる。

「特別な瑞雲だ」

木曾の表情が強張った。そのまま、やや目を見開き、木曾の口から驚愕の声漏れた。

「瑞雲……だと……？」

そのまま木曾は床を見、数秒考え、また日向を見た。

「なるほどな……。礼を言うぜ。邪魔したな」

木曾は居室から退き、上り框に座って靴を履くと、部屋を後にした。
「……伊勢よ、これでよかったのだろうか」

木曾が離れてしばらくしてから、日向が呟くように言った。突然の出来事にもさして心を乱されなかったのか、視線は艦載機に向き、選別を再開している。

「今わからなくても、そのうちわかることよ。ま、ナイスプレーじゃないの日向」

伊勢は、鬼気迫る様子の木曾を躲した伊勢を賞賛した。生半可な演技であれば食い下がられていただろう。

*

『夜戦用の魚雷にして、艦載機でもあるのか？ あいつ、どんな超兵器を隠してるんだ……』

伊勢らの安堵など露知らず、木曾はデイルドに思いを馳せながら次の目的地を目指した

ディルド茶道 十・十一

十

「だいぶ泡立ってきたな。長い道のりだった」

「私のも負けちゃいないぜ」

「お、お茶はカップチーノじゃないのです、そんな泡だらけにしなくてもいいのです」

モコモコと泡立った長門、武蔵両名の抹茶を、電が見とがめた。暁にとつては、武蔵の茶については泡以上に気になることがあった。

「武蔵さんのなんて、なぜか墨色になってるわよ！ 一体どうしたの」
実際、武蔵の器に立った泡は、なぜか墨色になっている。どういう理屈かはわからないが、長門はなんとなく主砲の威力と関係ある気がしてしまった。

「どうも何も、無心でかき混ぜていただけなんだがな」

当の武蔵はそれが誇らしいとは思わなかったし、本人としてはもつとおいしそうな茶を点てたかった。

「くっ……ディルド茶道、道だけあってすぐに極められるものではないか」

「別にいいじゃない！ 初めなんてみんなそんな感じよ。初心者なら仕方ないし、もつと私たちを頼っていいのよ！」

思わぬ躓きに屈辱を覚えた長門を、雷がすかさず宥めた。

「ああ、頼む！ この長門、何としても淑女の嗜みたるディルド茶道を極めて、提督に究極の一杯を……」

「抜け駆けかい？ そうはいかないぜ。私も至高の一杯を振る舞ってやる」

ただでさえ真剣そうな二人の眼差しは、もはや闘志を滲ませるがごとく熱を帯び始めていた。

「その調子よ！ じゃあ、暁流秘伝を教えてあげるわ！」

「もう、雷！ 勝手に秘伝を広めないでよ！」

調子づき始めた雷を暁が諫めると、秘伝がどうのから口論が始まり、自分の担当だの、お互いの腕前だの、教え方だの言い争い始め

た。気付いた電が止めに向かったが焼け石に水で、おろおろするばかりであった。

一方、部屋の半分ですったもんだしているにも拘らず、那智は静かに器の中で円を描いていた。

「ふむ、これで出来上がり、なのか」

那智が器を置くと、響がそれを覗き込んだ。そして、何も言わず、ただじっとその縁を眺めた。静かに、ただひたすらに。

「何だ」

数十秒経って那智が尋ねると、響は那智の方を向き、ようやく口を開いた。

「X O P O Ⅲ O。初めてでここまで理想に近いお茶を点てるなんて、那智はデイルド茶道の申し子なのかもしれないね」

師の惜しみない称賛を受けても、那智の表情は相変わらずであった。

「ふむ、光栄だな。しかし、私のデイルド茶道はまだ序の口だ。この相棒とともに、さらなる高みに上り詰めるぞ！」

しかし、その言葉は実に楽しげでやる気に満ちていた。

「それはいい心がけだね。でも、そんなに肩肘を張る必要はないよ。デイルド茶道でみんなが豊かな時を過ごすことができれば、私達は嬉しい」

響はそこまで言い終えると、自分の茶を啜った。

「……不知火は、少し余裕が無かったのかもしれない」

二人の様子を見て、不知火は再び、肘も使って器に円を描き始めた。もはや自室での屈辱などどうでも良かった？

十一

『戦艦寮での収穫は伊勢と日向だけだったな。陸奥には逃げられるし大和は留守。扶桑と山城は何やら花を活けているようだったし、金剛姉妹は茶をしばいていた。まあ、機密の一端でも掴めただけよしとするか』

そんなことを考え、歩みを進めた木曾の視線にあるのは、この鎮守府でも特にコンパクトな寮。外観は平屋の一軒家にしか見えない。

『とにかくだ、魚雷の話となると餅は餅屋。ここしかないだろう』

潜水艦寮。戦艦寮の二人部屋の倍はあろうかという玄関に上がり、木曾は居室の戸を叩いた。引き戸を叩いたとき特有の梓同士が当たる音と、戸の軋みが響く。

「お客さんとは珍しいのね」

木曾を迎えたのは伊19。三か所で結んだ珍妙な髪型をしている。顔は駆逐艦程度の歳に見えるが、いろいろと年齢の推測を困難にしている事情がある。幼い顔立ち故、スクール水着を着ているのは分かるが、それに覆われた肢体は顔とはアンバランスなほどの発育を見せている。

「ああ、邪魔するぜ。にしても、着任以来滅多に会っていない気がするが」

木曾は部屋を見渡した。畳張りのがらんとした部屋の真ん中で、やかんが火鉢にくべられしゅんしゅんと音を立てている。これから茶にするつもりだろうか。

「イムヤたちはだいたいいつも出撃してるわよ」

シヨツキングピンクの一つ結びを垂らした頭が、上がり込んだ木曾に振り向く。姉の伊168だ。

「例の資源確保か。ずっと鎮守府を支えているお前たちには本当に頭が上がらないな」

彼女たち潜水艦が、日夜資源を拾うべく反復出撃しているのは鎮守府では周知の事実であった。むしろ彼女らにとって、今や戦闘よりも物資調達が主な任務と化している。

「それで、話って何なんですか？」

部屋の隅で本を読んでいた伊8も、来訪者の声に顔を上げた。

「いや、魚雷の話でな、お前ら魚雷には詳しいんだろう」

「魚雷さんの話なら負けないでちー！」

いつの間にやら伊58も木曾の後ろで正座していた。部屋の中央まで来た木曾が四方を囲まれた形となった。

「だったらお構いなく聞かせてもらおう。デイルドとは何か、教えてくれ」

その言葉を聞くと、潜水艦一同は顔を見合わせ、19と168は視線で会話をする。

『魚雷とは関係ない気がするのね』

『ワオ！ 流れがさっぱりわからないわ』

助けを求めようにも皆戸惑うばかりなので、58、8は露骨にシラを切った。

「え？ 何でち？」

「私も知りませんね〜」

「おい、どういうことだ？ 多摩姉は確かに魚雷だと言っていたぞ？」

『本当に知らないみたいなのね……』

『多摩さん……面白い方の方ですね』

いつも水中にいるからか、潜水艦らは目配せだけでほぼ完璧な意思疎通を見せた。

「デイルドなんて知らないでち、力になれなくてごめんなさいでち」

「ほかに何か質問はないの？」

「おいおいとぼけるなよ、デイルドが秘密なことぐらい知ってるから、気にしないでいいんだぜ」

しかし、何か知っているのは明らかなので、木曾はやはり食い下がった。

「私達が気にするでち！ ハッ！」

『まずいわ！ 根掘り葉掘り聞かれたらごまかしきれないじゃない！』

うっかり本音を漏らした58を168が無言で叱責した。

「やっぱり知ってるじゃないか。いいだろう？ 教えてくれても」

「ごめんなの、デイルド茶道については一切力になれないのね……」

「あまり大きい声でする話でもないわ」

大きい声でする話でないのは事実であった。

「そうかい、お前たちも提督側か……。仕方ねえ、これ以上聞いても無駄なことだろ？ 邪魔したな。機会があれば、また魚雷の話でもしようぜ」

これ以上根掘り葉掘り聞いても無駄だと察し、木曾は退いた。とり

あえず潜水艦たちはデイルドを秘匿したいというのは確定事項となつた、それで良かった。

「ごめんなさいね……」

その後ろ姿を8が見送る。最初の剣幕に反して妙に潔いのが、潜水艦たちには引つ掛かった。

『緘口令か、まどろっこしいな』

提督が想像以上に周到に秘密を作ったことがわかり、木曾は苛立つた。

しかし、ここで諦めては提督の思う壺だと、木曾は知り得た情報を整理する。

『連中にとつても隠しておきたいこと……何がある？ 資源関連でなければ戦闘……？ 潜水艦といえど先制雷撃——!!』

なるほど、デイルドは俺たちと潜水艦以外にも先制雷撃を可能にするのか！ 普及すれば連中はいいよ被害担当と資源稼ぎしか使われなくなる、それで頑なに！』

「わかつたぜ、また一つ。聞けば聞くほど恐ろしいじゃねえか、デイルドって奴は」

*

「そろそろ行つたかしら？」

その姿が見えなくなつたのを確認し、8が玄関と居室の戸を閉めた。

「海の底で見出した秘伝は門外不出なのね」

「絶対にこれを極めて、私たちはオリヨクだけの船じゃないことを知らしめるのよ」

そして、押し入れから風呂敷包みを取り出す。

風呂敷から現れたのは器と、棗と——それぞれの相棒だ。

「デイルド茶道・伊流、特訓を始めるでち！」

19の決然とした合図で、彼女らは一斉に相棒を手にした。

さっ。

ちよろろ。

しやかしやかしやか……？

デイルド茶道 十二・十三

十二

駆逐艦寮の方は、特訓は終わって皆一息という様子だ。

「記念すべきレディーへの第一歩はここまでね！」

「私達が教えられるのはこれくらいかな。みんな才能に溢れているから、練習すればきつと一流のデイルド茶人になれるよ」

「困ったらいつでも言いなさい！」

「みなさんもまた、暁流の門下生なのです」

それぞれが驚くべき集中を見せ、あつという間にメキメキと上達した。それだけではない。相変わらず凜々しい顔も、どこか満ち足りている。

「ああ、ありがとう。戦い一辺倒だった生活に新しい風が吹いたような、すがすがしい気分だ」

「まあ、なんだ。こういうのもたまにはいいな」

「礼を言うぞ、悪くない経験だった」

「自分を見つめなおすいい機会になりました。不知火、一流のデイルド茶人までは遠いですが、ゆっくりでも確実に、精進します」

「うんうん、皆よくわかつてるじゃない、私もうれしいわ！」

「何でそんなに威張るのよ！ 私がお姉さんなんだから私に締めさせなさいよー！」

「じゃあ、これにて解散としようか。До ^{ダス} свиданія ^{スビダニヤ}」

「デイルドは持ち帰って、大切に使うのです？」

十三

「実に楽しかったな、デイルド茶道」

長門はやりきった顔で武蔵に言った。

「敵を討つのはまた違った楽しみだ」

相変わらず戦闘本位の武蔵だが、実際その顔はどこか楽しげだ。

「しかし、折角だから誰かに振る舞いたいぞ。妙高型で茶会をやってもいいが……」

「フツ、提督だろう?」

武蔵が口元に笑みを浮かべたまま那智を見る。凶星を突かれてなお那智は仏頂面だったが、それとなく視線を外した。

「確かに、司令も途中でお帰りになってしまいましたし、不知火達のお茶を飲めなかったのを残念に思っているかもしれませんが」

さも提督の心情のように言っているが、実際は不知火のそれである。

「私と武蔵は提督に振る舞おうと思っっているんだが、二人も一緒にどうだ? 大勢のほうがきつと楽しいだろう」

「ふむ、面白そうだ。不知火もやるだろう?」

「もちろんです。それまでに最高の一杯を作れるよう、備えるつもりでしょう」

そうして廊下で盛り上がる四人が、廊下の丁字の合流点に差し掛かった時。

「なにになに? 面白そうですね!」

ふわっと跳ねた、薄桃色の髪を後ろに靡かせ、艦娘が四人の前に躍り出た。彼女は、高く、元気そうな、しかしどこか芝居がかった大仰な口調で、よどみなく話し始めた。

「青葉聞いちゃいました! 折角ですから、鎮守府のデイルド茶人を集めてお茶会を開きましょう! 鎮守府はまさにデイルド茶道戦国時代! 司令官に最高のデイルド茶人を決めてもらおうんです!」

「ほう、面白そうじゃないか」

眼鏡の奥で瞳を煌めかせる武蔵。

「司令官と私達はもちろん、艦種を超えて親睦を深められます! この企画はすごいですよ!」

「フフ……不知火を本気にさせましたね」

不知火の目つきが鋭さを増した。
「肩肘張ってやるものではないとしても、名誉のためなら私は手を抜かないぞ」

那智の眉間に力が籠る。

「デイルド茶道でもビッグセブンだということを証明して見せよう

じゃないか」

拳を握る長門。——言っている内容については誰も深くは考えなかったらしい。

「フツ、そしたらお前は私には勝てないってことにならないか？」

「何、経験の差というものをだな」

各々が盛り上がっているのを眺め、青葉は内心でガツツポーズした。

『皆さん、なんで今日始めたばかりのことでこんなに熱くなっているんでしょう？ でも楽しみです！ 何より青葉、ビジネスチャンスです！』？

デイルド茶道 十四・十五

十四

木曾は、鎮守府の外れ、薄汚れたトタン張りの建物を尋ねた。壁は二階建て分ほどの高さがあり、出入り口は大きく、見るからに居住を目的としたものではない。

その大きな扉の前で、木曾が立ち止った。

「ついに来たぜ、工廠……！ おーい！ 誰か居ないのか！」

「はーい！ あら、木曾さんですか！ 明石をお呼びですか？」

快活そうな声が返ってくる。少し遅れて、レールに詰まった砂を轆き潰しながら、鉄の扉が開いていく。奥から現れたのは工作艦・明石。美しい桜色の髪をしている。側頭部の髪は耳の後ろで結んで前に垂らされ、後ろ髪は腰まで伸びている。よくもまあ作業の邪魔にならないなあ、と、木曾は乙女心のかけらもない感想を持った。

「ああ、ひとつ俺から、発注したいものがある」

「え？ でも、兵装の開発の指示は提督が……」

「その提督を出し抜くためなんだ。いや、お前も知っているんだろう？ 新兵器の計画を」

ニイツ、と、右の口角だけで笑みを浮かべる木曾。

「し、新兵器？」

怪訝そうだった明石の表情が、瞬時にして驚きに塗り替えられた。

「ちよつと待った！ その話、詳しく聞かせてもらえるかしら？」

明石の上げた声に、奥から別の声が走ってきた。

「何だ、お前もいたのか」

作業着の艦娘は薄浅葱の髪を後ろで結び、金属製の無骨な溶接面を持っている。軽巡夕張だ。一体何をしていたのかは分らないが、顔面からつま先まで、ところどころが煤にまみれ、作業着にも所々穴や油染みができている。小汚いといえば小汚いが、それがかえって彼女の可憐な顔立ちを際立たせているようだ。汚れはスイカの塩のようなものだろうか。

「新兵器といえば私でしょ！ あと明石、何尻込みしてるのよ！ 新

しいものはどんどん試す、それでこそ技術者じゃないのかしら？」
そして、見た目通り彼女も新武装に興味津々である。何か不穏なものを感じていた明石とは大違いで、疑う様子も無く、猛烈に張り切っている。

「そう言われると、私も興味が無いと言えば嘘になりますね……」

「そう来なくちやな。で、本題だ、俺が聞いたところによると——」

木曾は、己の収集した情報から推定した仕様をつまびらかに語った。

「えっ何ですかそれは……。実現できるかどうか……。いや、それを何とかしてこそ工作艦です！ お任せください！」

「なんだかこんでもないわね。でも試したくて仕方ないわ！ 全面的に協力するから、絶対に完成させましょ！」

木曾の話す新兵器は、荒唐無稽ではあった。しかし、実現すれば並々ならぬ戦力になるのは間違いない。そう思うと明石も夕張も、困難な挑戦であるとわかっていているからこそ奮い立つのであった。己の技術で既成概念を超えてやろうという、まさしく技術者の矜持が彼女の血を沸かせていた。

「海域の解放までに、なんととしても完成させてくれよ」

二人の目の輝きを見て、木曾は勝利を確信するのであった。

十五

「司令、司令？」

「う……。ハッ?!」

不知火の声で、提督は目を覚ました。

いつの間にか執務室の隣の宿直室に寝かされていたようだ。

「急に倒れられたんですよ、すこし根を詰めすぎたのでは？」

気付くと妙高が、頭の横、一步離れたあたりに正座し、心配そうにこちらを覗き込んでいる。ずっと付き添っていたのだろうか。

「いや、そういう訳じゃないんだが……。し、不知火」

不知火も妙高の隣に座っているが、やはりというか真顔だ。

「不知火に何か落ち度でも？」

「いや、楽しかったならいいんだ……」

良いわけがないのだが、提督はこの問題はさて置いて、まずは作戦立案をすることにした。もともと昼の会食のために夕方に予定をずらしている。休んでもいいが、一度言い訳するとずっとしそうで、やると決めたことをやらないのは提督にとつて何か恐ろしかった。そして提督自身、想定外の出来事に翻弄されていてはこの仕事は務まらないと理解していた。

「今からちよつと仕事を片してしまいたい。妙高、埋め合わせは今度必ずする。今日は済まなかった」

「あまり無理をなさつてはいけませんよ。それではまた、よろしくお願ひします」

ペこりと頭を下げ、妙高が宿直室を出た。提督は彼女に感謝すると同時に、自分の不甲斐なさを責めた。

「ああ、ありがとう」

今はそう言うのが精いっぱいだった。

「……司令。たまには息抜きも良いもの、ですよ」

「ああ」

……今日息抜きする筈だったんだがな、と、思いつつも、提督はとにかく海図を広げた。？

デイルド茶道 十六〜十八

十六

「大デイルド茶会は海域解放の二日前、一週間後です！ 提督には攻略を目指して絆を深めるための食事会と伝えておきました！ サプライズゲストです！」

六日間、艦娘たちは出撃や鍛錬の合間を見つけてデイルド茶道の研究を重ねた。皆、提督の賞賛を受けたいという一心だった。

——そして当日、デイルド茶人たちが大広間に集まった。

「暁流こそ真のレディーの道よ！ 見てなさい！」

「淑女の称号は私にこそ相応しいわ！ さあ、行くわよ！」

「私が皆にデイルドの本当の使い方を教えてあげるわ……見ててね、北上さん」

「大勢でやるのも、悪くない」

暁、足柄、大井、若葉。デイルド茶道四巨頭と呼ばれる艦娘たちである。もはやどのような経緯でこの競技が生まれたかも覚えていないが、彼女らには第一人者という誇りがあった。のだろうか。

「今こそ潜水艦の力を見せる時！ 遊びでデイルド茶道をやってる艦になんて、負けないわ！」

そして、伊168。潜水艦の待遇を向上するという明確な目標がある彼女は、負けるわけにはいかない。こんな時が来るのを待ちわびて、伊流一門はひたすら己のデイルド茶道を極めてきた。のかもしれない。

「皆、気合は十分なようだな。しかし私も負けてやる気はない！ 研究の未辿り着いたビッグセブンのデイルド茶道を見せてやる！」

「フツ、全力で戦うまでさ、主砲以上の衝撃を皆に与えてやろう」

「足柄に羽黒……デイルド茶道の経験は浅いが、私は優れた師を持てた。何より私自身、デイルド茶道に真剣に向き合ってきたんだ。那智の名とこの相棒にかけて、勝たせてもらおうか！」

「人がどうあろうと不知火は不知火です。私の最高傑作を、必ず……」

そして、あの日、暁たちから技を授かった四人。

それぞれ、真剣な顔で座して号令を待つ。己の全力を、彼に捧げるために。

が、当の本人はそんなことは知らず、単なる食事会だと思っ
てひよっこり現れた。

「凄いじゃないか！ 本当にこんな大勢を集めてくれたんだな！ 感謝するぞ青葉」

「広告も企画も、青葉におまかせ！」

到着した提督が、上座に置かれた座椅子に腰掛けた。青葉は得意げだ。

「それでは皆さん！ 覆いを外してそれぞれの道具をお取りください！」

続く号令と共に、一斉に座った艦娘たちの前の覆いが外された。ばさっ。

「っ!？」

ずらりと並んだデイルド。提督は、ただただ驚愕した。

「準備はよろしいでしょうか？ では、合図に合わせて、それぞれの作法に従って始めてください！ 制限時間は一時間！ よーい、始め！」

すっ。さーっ。ちよぼちよぼ。

しやかしやかしやかしやかしやかしやかしやかしやかしやかし
しやかしやかしやかしやかしやかしやかしやかしやかしやかし
しやかしやかしやかしやかしやかしやかしやかしやかしやかし

しやかしやかしやかしやかしやかしやかしやかしやかしやかし
しやかしやかしやかしやかしやかしやかしやかしやかしやかし
しやかしやかしやかしやかしやかしやかしやかしやかしやかし

「う、うわあああああああー！」

狂乱する提督。艦娘たちが揃ってデイルドで器をかき回しているのだから、無理もない。

「どうしたんですか提督！ 皆の美しい立ち振る舞いをご覧になってください！」

確かに皆が正座し、器をかき回す様は優美そのものだ。しかし、その手に握られているのはデイルドである。デイルドなのだ。

「ヒツ、ひいいい」

悪夢を超えた、美しき地獄の頭現に、ただ戦くことしかできない。

「……督、提督ー！」

いつの間にか座椅子から転げ落ちた提督に、頭の後ろから呼びかける者がいる。

「う、あ……」

「しっかりと皆の姿を見るんですー！」

「みよ、妙高？」

それは、あの日と同じく、妙高であった。厳しく提督を鼓舞する妙高。

「みんな提督に最高の一杯を振る舞うために頑張っているんですー！」

「そ、そうなのか」

全く意味がわからないが、とりあえず提督は立ち上がった。

「ほら、ご覧になってください。一心に器をかき混ぜるその所作、これ以上に美しい物がございますか？」

艦級を問わず、ずらりと並んだ艦娘たち。誰もが真剣な面持ちで、

一心に、ひたすらに茶碗に向き合っている。その胸に浮かぶのは、

『提督……！』

『提督……！』

『提督……！』

『不惑』

『レディー……！』

『勝利……！』

『地位向上……！』

『北上さん……！』

ただ一つ、という訳ではないようだが。

「皆、俺のために……！ あんなに真剣に……！」

見ていた提督は感動したらしい。

「ああ……」

目に涙まで浮かべ、感じ入っている。近頃は執務室に籠りきりだったので、艦娘たちの顔もろくに見られていなかった。それなのに彼女たちがここまで自分を想ってくれているのが嬉しかった。隣で妙高が、控えめに笑っている。

「ふふ、私も習いたかったですね、デイルド茶道」

『そこまで言って自分はやってないんですか?!』

一部始終を見ていた青葉は、なぜいい話っぽくまとまりそうなのか全く理解できなかった。

そうして、参加者たちがひとしきりかき混ぜ終わり、持ち時間は終了した。若葉はやや悔しげであった。あと十八時間はやるつもりだったが、時間切れ扱いで中断されたのだ。

「さて、終了です！ それでは審査に移ります！ 提督、よろしくお願ひします！」

「待て青葉、俺にそれはできない」

「えっ？ 何ですか？」

青葉は予想外かつ予定外な審査辞退に面食らっている。

「なまじ皆の真剣な姿を見てしまったばかりにだ。こんな大勢が俺のために集まって、俺のために一心不乱に器をかき混ぜている。俺はそれがとても嬉しかった……。優劣など付けられない。皆の尊い姿勢を踏みにじる訳にはいかない」

「待ちなさいな！ 私は最高の淑女の称号を賜うために……！」

やるからには勝ちにこだわろうとした足柄。しかしそれを那智が制した。

「やめておけ足柄。私たちが間違っていたのだ。デイルド茶道は腕前を競うものではなかった」

「x o p o s h o …… さすがはデイルド茶道の申し子だ」

響はやはり無表情である。しかし、その眼差しと声は満足気だった。

「フツ、提督め、糞真面目なのは相変わらず、か。まあいい、私達が欲

しかったのは名誉なんかじゃない、だろう?」

「ああ」

「デイルド茶道に終わりは無い、ですか」

長門、武蔵、不知火も、デイルド茶道を通じて、それぞれ得難い物を得られたようだ。デイルドで茶を泡立てる技術など、敵を討つことからは見つけようも無かっただろう。

「俺ももっと皆と向き合う時間を取ったほうが良かったみたいだな。皆が戦場以外でこんなに生き活きとした表情を見せてくれるなんて」

提督は、近頃の己の姿勢を省み、悔いた。皆こんなにも自分を慕ってくれている。自分なりに思いやってきたつもりだったが、これからはもっと皆と交流しよう、そしてもっと彼女たちを知ろうと、提督はそう思った。

「ちよつと待ったクマ! 最優秀者を決めなきや賭けにならないクマ!」

観戦に徹していた艦娘たちが困惑している。

「どうしても品評会がしたいなら、あらかじめ俺と皆にそう伝えて、ルールも決めて来てくれよ。あと賭けはするな。青葉は後で執務室に来るように」

「ひいっ」

まさかの大目玉の予感に、青葉は縮こまった。

「それじゃあ皆の点ててくれたお茶を飲むとするか」

そう言って、提督が上座から艦娘たちの元へ向かおうとしたその時。

「ちよつと待った!」

大音声が響いた。下座あたりの障子が乱雑に開けられた。思い切り障子を押し、右手が水平に伸ばされたままのポーズで、片目で提督を睨みつけている艦娘。

「お前か……木曾」

俯き加減で、口元には掴み所のない笑みを浮かべている。

「おい提督よ、俺に秘密を作ろうなんて思っても無駄だということをお教えてやるぜ」

意図の読めない闖入に、広間に集められた艦娘たちがひそひそとざわめく。

提督は困惑した。木曾の求めた秘密は、艦娘たちの前や、脇や、手の中にいくらでもある。

「期間限定海域に投入するつもりだったんだろう？ どうやらとんでもない兵器だったらしいが、俺たち三人で造ったこれには敵う筈もない」

「工作艦明石、会心の出来です！」

「試験は完璧よ！ これはまぎれもなく傑作だわ」

木曾に続き、明石と夕張が入場する。広間は一層騒然とした。

「明石に夕張……？」

ますます意味が分からず、提督は、得意絶頂に浸る木曾をぽかんと眺めるほか無かった。

その間抜け面の意味など分からない木曾は、顔の前に拳を握り、音吐朗々と語りだした。

「高威力の先制雷撃が可能！ かつ！ 軽巡以上のあらゆる艦に搭載可能！ しかも夜戦でも使える！ これこそがお前が隠し続けてきた秘密兵器 『ディルド』 だ！ しかもおそらくこっちの方が高性能だぜ！」

「え」

「はっ？」

「え……何それ……」

木曾が不意に取り出した、得体の知れない艦載機のような何かを眺め、明石、夕張、そして提督は、それぞれ理由は違えど同じように、ひたすら茫然とした。

その様子を見て木曾は、ふん、と鼻を鳴らした。着任以来、最高のしたり顔であった。

十七

新兵器ディルドは、夜戦における先制攻撃で一方的に深海棲艦を殲

滅。期間限定海域を凄まじい速度で攻略したこの鎮守府は、一気にその評価を上げることとなった。

デイルド茶道は禁止された。

一八

「山城、デイルド茶道が禁止されたみたいよ」

「姉さん、ついに私達に運が回ってきましたね」

「いよいよ扶桑型の時代を作るときが来たのよ」

「私達二人が始めた」

「オナホ華道で！」